

学生の介護実習報告からSOC (Sense of Coherence) 視点での検討

Examination from the viewpoint of SOC (Sense of Coherence)
from student care training report.

廣 野 正 子*

Masako Hirono

SOC was defined as the stress handle ability, and it was assumed to have some something to do with an experience of a nursing training in SOC. Then, as a preliminary study, we analyzed the practical training experience of SOC sense of comprehensibility, sense of manageability, and meaningfulness in the nursing care practice report of the student who experienced three step nursing practice.

I. はじめに

1. 研究背景

わが国では、急激な高齢者人口の増加により介護の社会化への必要性を高め、1987年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、介護福祉士という国家資格が誕生し介護福祉士教育が翌年より始まった。

介護福祉士養成課程の教育時間は、当初1500時間以上の指定時間であった。1999年に介護保険法の実施に併せて、高齢者領域の科目が強化され、150時間延長され1650時間以上に改定された。次に2007年に「社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改正する法律」により、養成科目が「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域に分類され、1800時間の指定時間となり認知症の介護等従来の身体介護にとどまらない介護ニーズの多様性への対応が明示された。この3領域のねらいは、介護福祉学の体系化を図ることであり、「介護」を展開するために必要な理論と知識として「人間と社会」「こころとからだのしくみ」が位置付けられた(川廷2008)。2011年の法改正により、介護福祉士の業務として喀痰吸引等が位置付けられることになり「医療的ケア」の領域が追加され教育時間が1850時間となり、より多様化する介護ニーズへ対応する高い専門性が求められた。

「介護」の領域では、「その人らしい生活」を支えるために必要な介護福祉士としての専門技術・知識を学ぶための構成とされている。その中に含まれる介護実習は450時間を占め、理論

* 人間生活学科

と実践の統合により介護福祉士としての倫理、資質、知識と技術の向上がなぜ必要なのかを体験的に学べる中核的な位置にある。

介護福祉士養成課程における教育で重要とされる介護実習は、学生に貴重な学びとなることを多くの研究者が報告している。立瀬・鏡森・関根(2006)は、介護の態度や接し方、基本的な生活介助、介助におけるコミュニケーションの重要性を得られたとしている。熊谷・山田・加邊ら(2018)も利用者本位に向くアセスメントの視点、利用者と良好な関係を築くためのコミュニケーション力が得られ、しいては個別ケアの実践できる利用者本位の介護への実践に活かされていることを明らかにしている。吉田・鈴木・阿部ら(2015)は、介護観を構成する知識、技術、態度の視点が身につけているとし、竹村(2006)は、自己決定的な介護動機づけを高め、介護動機づけに肯定的効果があるとしている。学生の「協調性」「積極性」「研究心」が高まった(高島2000)などの効果が多数報告されている。その反面、決められた一定期間に、未知の環境に自己を適応させながら実習課題や記録に取り組むため、学生にとって強いストレスとなり、それが不安を感じさせる要因にもなっている(柘崎・田中・中野ら2003)。不安について、施設利用者のQOL向上のために直接的ケアを展開する実習においては、知識・技術不足が学生の不安に多大な影響を及ぼすと横山(2008)は指摘している。QOLの定義はいくつかあるが、WHO(1994)は「文化や価値観により規定され、その個人の目標、期待、基準および心配事に関連づけられた、生活状況に関する個人の知覚(perception)です。QOLはその人の身体的健康、心理状況、依存性レベル、社会関係、個人的信条およびその人の周りの環境の特徴とそれらとの関係性を複雑に含んだ広い範囲の概念」としている。介護におけるQOLについては、生活の質のほか人生の質、生命の質などといわれ、生活者(利用者)の満足度、安定感、幸福感を規定している諸要因の質であると解説されている(是枝2016)。

介護実習を体験することにより学生は何らかのストレスを感じながらも成長していることは確かである。これは看護学生を対象にした研究ではあるが、実習は学生自身がストレス・対処行動をうまくとれるかが成功のカギであると報告されている(高橋・本江・古市ら2011)。介護実習においても同様に、より多くの学びを修得するためには、実習におけるストレス対処が重要であろう。

2. SOC (Sense of Coherence) と関連する概念

近年ではストレス対処能力の指標としてSense of Coherence(以下SOCとする)が注目され多くの実証研究(山崎1999; 戸ヶ里・山崎2009; 高阪・戸ヶ里ら2010; 蛭名2003; 中島2008; 江上2008など)が行われている。SOCは、大きなストレッサーに耐えて心身の健康を保持し、対処に成功している人々の中核に共通して存在する心理的要因で、自分の生きている世界は首尾一貫しているという感覚のことで、保健医療社会学者のAntonovsky(1987)により

開発された概念である。この感覚を強く持つ者はストレスに対して効果的に対処することが可能であることから、本研究ではSOCをストレス対処能力と定義する。SOCは自分の置かれている、あるいは置かれるであろう状況がある程度予測でき、または理解できるという把握可能感 (sense of comprehensibility)、何とかなる、何とかやっていけるという処理可能感 (sense of manageability)、ストレスへの対処のしがいも含め、日々の営みにやりがいや生きる意味が感じられるという有意味感 (meaningfulness) で構成される (山崎・戸ヶ里・坂野 2008)。そして、3つの感覚を持つことにより、ストレスフルな状況下にあっても多様な資源を動員して状況に対処し、健康を維持し、様々な経験を成長の機会にすることができると考えられている (Antonovsky1987)。

SOCは、自尊感情 (self-esteem)、自己効力感 (self-efficacy) といった概念とも一見類似している。しかし、SOCは周囲の人や環境との関係性が個人にとってどの程度信頼できるものであるかという観点から考えられており、個人の優位性を評価している自己効力感などの自己概念とは異なっている (山崎1999)。また、自己効力感、自尊心が高いとレジリエンスが高まるという相関関係を示している (齊藤・岡安2009)。

レジリエンスは日本語で、心の回復力やしなやかさ、精神的回復力などと訳されている。最近のレジリエンス研究をまとめた齊藤・岡安 (2009) によると、レジリエンス研究は1970年代から始まったとされるが、統一された定義は未だなされていない。そのなかで、最も代表的な定義とされているのがMastem et al. (1990) の「困難あるいは脅威的な状況にも関わらず、うまく適応する過程、能力、あるいは結果」である。米田・児玉・安藤ら (2018) は、SOCとレジリエンスの類似点と相違点について、類似概念ではあるものの、SOCは日常生活を健康に営む上で重要な感覚であり、レジリエンスはSOCを高めていたとしても生じるような逆境に対する適応力だと捉えていると述べている。

本研究は大学生の介護実習を対象としており、介護実習は要介護者の日常生活の支援を体験することから、日常生活で起こりえる事柄に対するSOC (ストレス対処能力) を視点とすることが適当であると考えられる。さらに、Antonovsky (1987) は、SOC形成には、安定したルールや規範の中での生活経験、適度なストレス下での成功的な対処経験、重要な意思決定における参加経験の3種類の経験を必要とし、それらが複雑に組み合わせたり、繰り返されることで形成されていくと指摘している。そして、SOC形成の時期は、成年前期の30歳代までとされており、大学生の時期も十分にSOCを育むことが可能であろう。特に自分に自信をもてるような経験などが、良好なSOC形成をもたらす可能性が高いとされている。

Ⅱ. 研究の目的

論文検索で「実習、SOC」では46件 (CiNiiによる検索) であり、そのうち看護学生を対象にしたものは30件で、24件は看護実習とSOCの関連について検証されている。SOCが低い学生はうつ傾向が高く、把握可能感の低さが関連している (小林・大屋・金谷2019)。SOCが高いほど心身の状態が良好 (山中・平賀・中本ら2016)、実習前後のSOC変化に優位な影響を与えていた要因として「看護過程の展開」と実習前のSOC値が高いことが実習後のSOC低下に寄与した (縦野・金子2016) などがある。しかし、介護に関係した学生を対象にしたものは見当たらない。看護実習の体験がSOCに関係しているのであれば、実習内容の差異はあれ、介護実習がSOCに関連している可能性も考えられるのではないか。

そこで、介護実習の体験とSOCには何らかの関連があると仮定し予備的な研究として、3段階の介護実習を経験した学生の介護実習報告書から、SOCの下位概念に該当する実習体験を検討することを目的とした。

Ⅲ. 研究の方法

1. 調査の対象

1年次に介護実習Ⅰ-1 (11日間)、介護実習Ⅰ-2 (23日間)、2年次に介護実習Ⅱ (23日間) の、合わせて456時間の介護実習を経験した3名の学生を対象とする。

2. 調査期間

2017年9月12日～2019年6月27日

3. 調査内容

1) SOCの測定

SOCの測定には、Antonovsky (1987) らが開発したSOCスケールを山崎ら (2005) によって和訳された短縮版であり、信頼性および妥当性も担保されている7件法版SOC-13 (遠藤・満石・和ら2013) を用いた (表1)。SOC-13は13項目の質問から構成され、「まったくない (1点)」～「とてもよくある (7点)」など7件法で、それぞれの得点を加算して13点から91点の間に分布する。得点が高いほど、ストレス対処能力が高い。

表1 SOC-13

SOC-13
1. あなたは、自分のまわりで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか (まったくない) 1-7 (とてもよくある)
2. あなたは、これまでに、よく知っていると思っていた人の、思わぬ行動に驚かされたことがありますか (まったくなかった) 1-7 (いつもそうだった)
3. あなたは、あてにしていた人ががっかりさせられたことがありますか (まったくなかった) 1-7 (いつもそうだった)
4. 今まで、あなたの人生は明確な目標や目的が、(まったくなかった) 1-7 (あった)
5. あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか (よくある) 1-7 (まったくない)
6. あなたは、不慣れな状況にいると感じ、どうすればよいかわからないと感じることはありますか (とてもよくある) 1-7 (まったくない)
7. あなたが毎日していることは、(喜びと満足を与えてくれる) 1-7 (つらく退屈である)
8. あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがありますか (とてもよくある) 1-7 (まったくない)
9. あなたは、本当なら感じたくないような感情を抱いてしまうことはありますか (とてもよくある) 1-7 (まったくない)
10. どんなに強い人でさえ、ときには「自分はだめな人間だ」と感じることもあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことがありますか (まったくなかった) 1-7 (よくあった)
11. 何かが起きたとき、ふつう、あなたは、(そのことを過大に評価したり、過小に評価してきた) 1-7 (適切な見方をしてきた)
12. あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がないと感じることがありますか (よくある) 1-7 (まったくない)
13. あなたは、自制心を保つ自信がなくなることはありますか (よくある) 1-7 (まったくない)

2) SOCに関連する内容の質的分析

吉田・鈴木・阿部ら(2015)は、各年次の実習報告書から縦断的な質的分析により介護観を抽出している。本研究においても、実習の体験記憶がリアルに残っている実習終了後に記載された各段階の介護実習報告書には、SOCの把握可能感、処理可能感、有意味感に該当する体験が表出すると考えられる。また、廣野(2018)は、介護職員のストレスに関するインタビュー調査から、SOCの把握可能感、処理可能感、有意味感について具体的な内容を示しているため分析について参考にした。

介護実習終了後、体験した事柄を学生は、自己評価を含め実習の振り返りを実習報告書に記述する。3名の学生の介護実習I-1、I-2、IIの実習報告書から分析する。記述された文章の前後の文脈から意味単位を切片化しコードづくりを行い、類似したコードのもつ意味を省察しラベル付けをした。ラベル付けをした概念を下位概念とし、その上に中位概念としてとし

でのサブカテゴリー、上位概念としてカテゴリーを作成し3段階の実習ごとにまとめた。

それぞれの実習において抽出された、上位概念のカテゴリーからSOCを構成する、把握可能感、処理可能感、有意味感、に關係すると考えられるカテゴリーについて分類した。妥当性と信頼性を高めるために、意味単位と概念の整合性、さらにサブカテゴリーとカテゴリーの内容について、介護福祉学を専門とする3名の研究者の解釈が一致するまで繰り返し議論した。

4. 倫理的配慮

研究協力に関して調査対象者に対して強制力が働かないように努めた。質問紙配布の際、守秘義務を遵守し匿名性を高めた対処を行うこと。また、回答をしない場合でも大学生生活において不利益を被ることがないことを文章と口頭で説明し、同意を得て質問紙の回答を頂いた。実習報告書についても同様の説明をもとに承諾を得た。

IV. 結果

1. 学生のSOC値

学生3名のSOC-13の平均値は59で、最小値41および最大値71であった。それぞれの平均値は、有意味感21.3、把握可能感19、処理可能感18.7であった(表2)。

表2 学生のSOC-13の平均得点

	SOC平均値	有意味感	把握可能感	処理可能感
n= 3	59	21.3	19	18.7

2. 介護実習報告書からのSOC 3要素の質的分析

1) 介護実習 I-1

介護実習 I-1の実習報告書から、72のコードづくりを行い、13のサブカテゴリー、8のカテゴリーを抽出した(表3)。本文中の表記はコードを「」、サブカテゴリーを〈〉、カテゴリーを[]とし説明する。

〈介護職員との関係が難しい学生〉、〈介護職員との良好な関係〉は、「質問したが職員からの返答がなかった」、「職員とうまく連携できなかった」など、職員との関係が難しく感じたことや、「わからない時は職員に質問」、「行動する前に職員に聞く」など職員から教えて頂いて理解が促され実践することがなされていることから、[介護職員と学生の関係]にした。

〈緊張する学生〉、〈落ち込む学生〉、〈何をしたらよいかわからず不安〉は、「緊張して表情が硬くなった」り、「慣れない介助」に職員から「もっと早くして下さいと指摘される学生」は、

「落ち込んで体調に出る」、「職員により介助方法が違う」など、どのようにしたらよいかかわらず「ただ立っていたことがある」と、緊張の様子から「ストレスを感じる学生」にした。

〈積極的にコミュニケーションをとる〉、〈積極的にできなかったコミュニケーション〉は、「話しかける時は笑顔」で、「利用者へ積極的に話す」、「会話困難な方にジェスチャーでコミュニケーション」をとるなど、また、「反応がない方との会話が積極的にできない」ことから「利用者とのコミュニケーション」とした。

〈利用者の心身状況を理解した介護〉、〈利用者に合わせて介助の実践〉は、「残存機能の低下防止のケアを考える」や、「利用者の安全面を考慮した介助」、「利用者に合わせて介助の実践」などから「利用者を理解した介助の実践」にした。

〈実習期間で記録する力がついた〉は、「日誌の記録を指導に従い改善」、「誰が見てもわかるように記録する」ことから、「記録力が身に付く実習」とした。

〈介護の仕事にやりがい〉は、「介護の仕事にやりがいを感じた」、「利用者から名前を呼ばれ嬉しかった」などから、「やりがいのある介護の仕事」とした。

〈視野を広く積極的に行動〉は、「職員の動きを観察」しながら、「視野を広く積極的に行動」していることから、「視野を広く積極的に行動」とした。

〈どんな行動も責任が必要〉は、「十分気をつけて行動」したり、「失敗したことを繰り返さ

表3 介護実習I-1における実習報告の分析表

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの抜粋
介護職員と学生の関係	介護職員との関係が難しい学生 介護職員との良好な関係	質問したが職員からの返答がなかった ／職員とうまく連携できなかった ／わからない時は職員に質問／行動する前に職員に聞く
ストレスを感じる学生	緊張する学生 落ち込む学生 何をしたらよいかわからず不安	緊張して表情が硬くなった／慣れない介助／もっと早くして下さいと指摘される学生／落ち込んで体調に出る／職員により介助方法が違う
利用者とのコミュニケーション	積極的にコミュニケーションをとる 積極的にできなかったコミュニケーション	話しかける時は笑顔／利用者へ積極的に話す／会話困難な方にジェスチャーでコミュニケーション
利用者を理解した介助の実践	利用者の心身状況を理解した介護 利用者に合わせて介助の実践	残存機能の低下防止のケアを考える ／利用者の安全面を考慮した介助 ／利用者に合わせて介助の実践
記録力が身に着く実習	実習期間で記録する力がついた	日誌の記録を指導に従い改善／誰が見てもわかるように記録する
やりがいのある介護の仕事	介護の仕事のやりがい	介護の仕事にやりがいを感じた
視野を広く積極的に行動	視野を広く積極的に行動	視野を広く積極的に行動
実習中はどんな行動にも責任が必要	どんな行動にも責任が必要	失敗したことを繰り返さない

ない」ように気をつけて行動することから、「実習中はどんな行動にも責任が必要」とした。

2) 介護実習 I-2

介護実習 I-2 の実習報告書から、43 のコードづくりを行い、15 のサブカテゴリー、6 のカテゴリーを抽出した (表 4)。

〈施設、職員間の連携〉、〈情報共有と意志の伝達〉は、「一日の流れを確認する黒板」や「施設の中で少しのことで報告・連絡・相談で連携」から、「施設、職員間の情報共有」とした。

〈職員が利用者を知るための観察視点〉、〈信頼関係を築くうえでのコミュニケーション〉、〈職員の利用者に対するアプローチ〉は、「昔の経験が現在の性格や行動に繋がる」ことや、「職員から利用者の性格、好み、得意なことを聞いた」ことで観察の視点を学び、「職員の声掛けの仕方」によって信頼関係に繋がることから、「職員の利用者に対する情報収集」とした。

〈理学療法士の利用者への支援〉、〈利用者に合わせた介護〉、〈利用者の状態により利用施設が違う〉は、「理学療法士の利用者へ専門的なアドバイス」や、「利用者に合わせた食事形態」、「施設により利用者の状態が違う」などから、「利用者の状態に合わせた介護方法」とした。

〈利用者にとっての役割〉、〈利用者に対する行事の大切さ〉、〈利用者が生活しやすい環境づくり〉、〈職員が介護事故を未然に防ぐ検討〉は、自治会の役員や「生活の中で役割をもつ利用者」は「自分でやるという強い意欲」があり、「利用者の意見を行事に反映」することで、「い

表 4 介護実習 I-2 における実習報告の分析表

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの抜粋
施設、職員間の情報共有	施設、職員間の連携 情報共有と意志の伝達	施設の中で少しのことで報告・連絡・相談で連携/大切/一日の流れを確認する黒板
職員の利用者に対する情報収集	職員が利用者を知るための観察視点 信頼関係を築くうえでのコミュニケーション 職員の利用者に対するアプローチ	昔の経験が現在の性格や行動に繋がる/職員から利用者の性格、好み、得意なことを聞いた/職員の声掛けの仕方から学ぶ
利用者の状態に合わせた介護方法	理学療法士の利用者への支援 利用者に合わせた介護 利用者の状態によって利用施設が違う	理学療法士の利用者へ専門的なアドバイス/利用者に合わせた食事形態
利用者が施設で快適に暮らす環境	利用者にとっての役割 利用者に対する行事の大切さ 利用者が生活しやすい環境づくり 職員が介護事故を未然に防ぐ検討	生活の中で役割をもつ利用者/自分でやる強い意欲/利用者の意見を行事に反映/ヒヤリハット会議がある施設
やりがいのある介護	介護への学生のやりがい 介護職員のやりがい	利用者から話しかけられ嬉しい学生/達成感のある仕事と話す職員
職員の利用者に対する捉え方	職員の利用者に対しての捉え方 ひとり一人の介護の仕方に正解はない	気になった所を支援する職員/ひとり一人の介護の仕方に正解はない

きいきしている利用者」が多く、「ヒヤリハット会議がある施設」から、「利用者が施設で快適に暮らす環境」とした。

〈介護への学生のやりがい〉、〈介護職員のやりがい〉は、「利用者から話しかけられ嬉しい学生」や「達成感のある仕事と話す職員」などから、「やりがいのある介護」とした。

〈職員の利用者に対しての捉え方〉、〈ひとり一人の介護の仕方に正解はない〉は、「気になった所を支援していく職員」や、職員により方法が違うことから「ひとり一人の介護の仕方に正解はない」など、「職員の利用者に対する捉え方」とした。

3) 介護実習Ⅱ

介護実習Ⅱの実習報告書から、55のコードづくりを行い、15のサブカテゴリー、8のカテゴリーを抽出した(表5)。

〈将来の介護職員になった際の課題〉、〈家族との信頼関係は重要〉、〈24時間職員の動きを拝見し勉強〉は、学生が就職しときに「多くのことを想定して知識が必要」、「利用者に合わせて介助が課題」と考え、利用者について家族から情報を頂くなど「家族との信頼関係は重要」で、夜勤の体験から「24時間職員の動きを拝見して勉強」することから、「将来、介護職員になった際の課題」とした。

〈積極的にコミュニケーションをとる学生〉、〈コミュニケーションを通して相手を理解できる〉は、「知りたいという意欲をもち接した学生」は、積極的に「学生からコミュニケーションがとれる」ことで、「コミュニケーションから相手の気持ちを理解できる」ことから、「積極的なコミュニケーションを通して理解する」とした。

〈お手本にしたい介護職員〉は、「常に利用者への良い支援を考える職員」や「笑顔で接する職員」に対して、「お手本にしたい職員」と感じていることから、「お手本にしたい職員」とした。

〈次の行動を考えられる学生〉、〈わからないことは職員に聞く学生〉は、「次の行動を早くするための考え」として介護内容を把握するために、「質問したいことはすぐにメモをする」、「わからないことは職員に聞く学生」から、「次の行動を考えられる学生」とした。

〈複雑で理解が難しい体験〉、〈夜勤のある変則勤務〉は、「職員により違う介助方法」や「意思疎通ができない利用者は複雑」なことから学生は難しいと考え、「夜勤は眠くなるのではと不安」と未経験からの戸惑いがあることから、「複雑で理解が難しい体験」とした。

〈充実した実習〉、〈やりがいのある介護の仕事〉、〈実習での収穫が多い〉は、「前回より短く感じた実習」と充実感があり、「介護、福祉職のやりがいを感じた」や、「主観と客観的視点が持てるようになった」、「人生の最期のケアに立ち会えた」から、「やりがい、充実を感じる介護」とした。

〈多職種間で情報共有による支援〉は、「情報共有することで利用者に合った支援」や、「多職種と情報共有する施設」から、「多職種間で情報共有による支援」とした。

〈利用者とのふれあい方が課題〉は、利用者と接する際に「笑顔が固まる学生」や、「利用者に寄り添いすぎて周りが見えない学生」から、「利用者とのふれあい方が課題」とした。

表5 介護実習Ⅱにおける実習報告の分析表

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの抜粋
将来、介護職員になった際の課題	将来介護職員になった際の課題 家族との信頼関係は重要 24時間職員の動きを拝見し勉強	多くのことを想定して知識が必要/ 利用者に合わせた介助が課題/家族 との信頼関係は重要/24時間職員の 動きを拝見して勉強
積極的なコミュニケーションを通して理解する	積極的にコミュニケーションをとる学生 コミュニケーションを通して相手を理解できる	知りたいという意欲をもち接した 学生/学生からコミュニケーション がとれる/コミュニケーションから 相手の気持ちを理解できる
お手本にしたい介護職員	お手本にしたい介護職員	常に利用者への良い支援を考える 職員/笑顔で接する職員
次の行動を考えられる学生	次の行動を考えられる学生 わからないことは職員に聞く学生	次の行動を早くするための考え/わ からないことは職員に聞く学生/質 問したいことはすぐにメモをする
複雑で理解が難しい体験	複雑で理解が難しい体験 夜勤のある変則勤務	職員により違う介助方法/意思疎通 がきかない利用者は複雑/夜勤は眠 くするのはと不安
やりがい、充実を感じる介護	充実した実習 やりがいのある介護の仕事 実習での収穫が多い	前回より短く感じた実習/介護、福 祉職のやりがいを感じた/主観と客 観的視点が持てるようになった/人 生の最期のケアに立ち会えた
多職種間で情報共有による支援	多職種間で情報共有による支援	情報共有することで利用者に合っ た支援/多職種と情報共有する施設
利用者とのふれあい方が課題	利用者とのふれあい方が課題	笑顔が固まる学生/利用者に寄り添 いすぎて周りが見えない学生

4) 各介護実習におけるSOC 3要素

介護実習Ⅰ-1、介護実習Ⅰ-2、介護実習Ⅱの実習報告書から抽出された、上位概念のカテゴリーをSOC 3要素の、把握可能感、処理可能感、有意味感、に分類し、これらに含まれないカテゴリーをその他にした(表6)。

表6 各介護実習におけるSOC 3要素

	介護実習Ⅰ-1 (1回目)	介護実習Ⅰ-2 (2回目)	介護実習Ⅱ (3回目)
把握可能感	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職員と学生の関係 ・利用者とのコミュニケーション ・視野を広く積極的に行動 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設、職員間の情報共有 ・職員の利用者に対する情報収集 ・職員の利用者に対しての捉え方 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的なコミュニケーションを通して相手を理解する ・次の行動を考えられる学生 ・将来、介護職員になった際の課題 ・利用者とのふれあい方が課題
処理可能感	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者を理解した介護の実践 ・実習中はどんな行動にも責任が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の状態に合わせた介護方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・多職種間で情報共有による支援 ・複雑で理解が難しい体験
有意味感	<ul style="list-style-type: none"> ・記録力が身に着く実習 ・やりがいのある介護の仕事 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が施設で快適に暮らす環境 ・やりがいのある介護 	<ul style="list-style-type: none"> ・お手本にしたい介護職員 ・やりがい、充実を感じる介護
その他	ストレスを感じる学生	なし	なし

(1)介護実習Ⅰ-1

介護実習は職員からの指示やアドバイスをもとに学んでいくスタイルであり、介護実習を理解するためには「介護職員と学生の関係」は重要であり、実習の対象である「利用者とのコミュニケーション」は、利用者を理解するうえで必須の行為である。さらに、学生は自身が置かれている状況を理解できるからこそ「視野を広く積極的に行動」できる。そこでこれらのカテゴリーを、状況を的確に把握することに該当することから把握可能感とした。

処理可能感はどのような状況に際しても何とかできるという感覚であるが、相手を理解したことで実践や行為を考えることができることから、「利用者を理解した介護の実践」と「実習中はどんな行為にも責任が必要」を含めた。

有意味感はあるゆる事象には意味があるという感覚で、介護実習日誌を毎日記載することで「記録力が身に着く実習」と捉え、利用者との関係性から「やりがいのある介護の仕事」と、介護に有意味感を持つことができる。

SOC 3要素に含まれないカテゴリーとして「ストレスを感じる学生」とした。〈緊張する学生〉、〈落ち込む学生〉、〈何をしたら良いかわからず不安〉、というサブカテゴリーからも、これにはSOCの3要素が含まれないことがわかる。

(2)介護実習Ⅰ-2

状況がある程度予測・理解されるには、「施設、職員間の情報共有」、「職員の利用者に対する情報収集」と情報収集・共有されることで、「職員の利用者に対しての捉え方」ができるこ

とから、把握可能感とした。

[利用の状態に合わせた介護方法] は、状態に合わせた方法があり何とか対処できるということから処理可能感とした。

[利用者が施設で快適に暮らす環境]、[やりがいのある介護] は、やりがいや意味を見出していることから、有意味感とした。

(3)介護実習Ⅱ

[積極的なコミュニケーションを通して相手を理解する] は、利用者を理解するための行為であり、置かれている状況を理解できることにより [次の行動を考えられる学生] となる。将来学生自身が、介護職員として働くことを具体的に想定することで [将来、介護職員になった際の課題] としている。また、[利用者とのふれあい方が課題] では、「話せない方とのコミュニケーションが課題」、「認知症の方とのコミュニケーションが課題」など、より難易度の高い方の理解を進めるうえでのことから把握可能感とした。

[多職種間で情報共有による支援] は、「利用者にあった支援」を「すぐに対応できる」ことが可能になる。[複雑で理解が難しい] としながらも、〈夜勤のある変則勤務〉に対して、「夜勤は眠くなるかもと不安」であったが、実際は「夜勤は眠くならなかった」と、何とかなることを体感していることから処理可能感とした。

[お手本にしたい介護職員] は、「常に利用者への良い支援を考える職員」や、「笑顔で接する職員」など、それぞれの行為に意味を見出していることから有意味感とした。

V. 考察

1. 学生のSOC値

SOC-13の値について、白井ら(2014)は、既存の研究成果をもとにSOC合計得点が52点未満をSOC低群、52点以上をSOC高群と設定した。これを指標とすると、本研究における3名のSOC-13の平均値は59点であったことから、SOCは高群に位置する。

3名の学生は、1年次の8月に11日間と年度末の2月に23日間、2年次の8月に23日間と、大学に入学してから半年ごとに介護実習を体験する。1回目の介護実習では、腑に落ちない体験があっても、その後の介護実習で理解できることがある。これは実習回数が増すごとに学生の不安感は低減することで(終崎ら2003)、学生自身がストレス・対処行動をうまくとれるようになり(高橋ら2010)、結果SOC得点が高群に値した可能性から今後、検証が必要である。

2. 各介護実習のSOC 3要素

3回の実習においてSOC 3要素の把握可能感、処理可能感、有意味感が、どのような変化

があるのか主なカテゴリーから考察したい。

把握可能感では、3回の実習を通してコミュニケーション、情報共有が入っている。1回目の実習では、利用者を理解するため学生は、様々な利用者に対してコミュニケーションを取る行為をする。話しかけたが返答がない、会話が続かないなどコミュニケーションの難しさを体感する。2回目の実習では、コミュニケーションの難しさを理解して、職員の情報収集の仕方や、施設、職員間の連携はどのように行われているのか、注意深く観察していることがわかる。そして、3回目の実習では学生自身が積極的にコミュニケーションを駆使し相手を理解すると共に、学生自身の課題や将来まで見通すことができるまでに至る。

処理可能感では、1回目の実習は「利用者を理解した介護の実践」から、2回目の実習では、より具体的な利用者の状態に合わせた介護方法を取り入れることを学んでいる。3回目の実習では、多職種間での支援など、より実践的な対応を得ている。

意味感については、1回目から一貫して介護のやりがいを感じている。それ以外では、1回目の実習では、学生が記録する力が身につくことを実感することでのやりがいであるのに対し、2回目の実習は利用者にとっての役割など学生自身のやりがいだけでなく、視野が広がり利用者自身に視点が及んでいる。3回目の実習では、お手本にしたい職員の行為への憧れから学生自身の近い将来のやりがいにつながっているようである。

その他には、SOC 3要素に含まれないカテゴリーとして、「ストレスを感じる学生」がある。これは、1回目の実習にのみであることから、初めての实習で、未知の不安が多く存在したことからであろう。2回目、3回目の実習ではストレスのカテゴリーがなかったことから、ストレス対処がなされている可能性も考え得る。介護実習では学生は多くの不安を抱えストレスを感じている。伊藤(2010)は、学生の不安を軽減させ実習効果を高めるためには、実習先の職員と学生とのよりよい関係作りの介入が必要であるとしている。今後、特に1回目の実習では、事前訪問から実習中において、職員と学生の関係に配慮した介入が求められる。さらに、「ケアする」ということは誰かの役に立つと同時に、自分の中にある弱さ、醜さ等を乗り越えていく過程でもある(澤田2004)。この過程を介護実習で乗り越えるためにも、良好なSOC(ストレス対処能力)を形成していくことが望まれるのではないか。介護実習とSOCの関係について研究していくことで、学生の成長へ還元していきたい。

VI. 結論

介護実習報告書からSOCの3要素を検討した結果、1回目の実習から把握可能感では、「介護職員と学生の関係」「利用者とのコミュニケーション」「視野を広く積極的に行動」の3カテゴリー、処理可能感では「利用者を理解した介護の実践」「実習中はどんな行動にも責任が必

要] の2 カテゴリー、有意味感では [記録力が身に付く実習] [やりがいのある介護の仕事] の2 カテゴリー、その他として [ストレスを感じる学生] が抽出された。

2 回目の実習から把握可能感では、[施設、職員間の情報共有] [職員の利用者に対する情報収集] [職員の利用者に対する捉え方] の3 カテゴリー、処理可能感では、[利用者の状態に合わせた介護方法] のカテゴリー、有意味感では [利用者が施設で快適に暮らす環境] [やりがいのある介護] の2 カテゴリーが抽出された。

3 回目の実習から把握可能感では、[積極的なコミュニケーションを通して理解する] [次の行動を考えられる学生] [多職種間で情報共有による支援] [利用者とのふれあい方が課題] の4 カテゴリー、処理可能感では、[将来、介護職員になった際の課題] [複雑で理解が難しい体験] の2 カテゴリー、有意味感では [お手本にしたい介護職員] が抽出された。

Ⅶ. 研究の限界

今回、3 回の実習毎に縦断的にSOCに関連するカテゴリーを抽出したことにより、SOCを高める教育支援を検討するうえで役立つことが期待される。しかし、対象学生が3名と少ないデータであり、また、分析として介護実習報告書を用いたことに限界がある。今後は介護実習前後のSOC得点と、介護実習がSOCへの影響があるのか学生個々の内面の変化に焦点を当てた質的研究が求められる。

参考・引用文献

- 川廷宗之介編『介護福祉教育方法論』弘文堂、2008
- 立瀬剛志・鏡森・関根「医学部医学科1年次の介護体験実習の教育評価—介護実習を介した医療人としての意識の変化を視点に—」富山大医学会誌, 17(1), 19-24, 2006.
- 熊谷佳余子・山田順子・河邊聡子・ほか「介護福祉士養成における在宅介護実習の位置づけ」川崎医療短期大学紀要(38), 49-54, 2018.
- 吉田清子・鈴木聖子・阿部明子・ほか「介護観の分析からみた介護実習の効果評価研究」岩手県立大学社会福祉学部紀要, 17, 43-49, 2015.
- 竹村明子「実践教育の効果：介護福祉士養成課程における実習体験と介護への自己決定性の関係」教育心理学研究, 58, 176-185, 2010.
- 高畠安代「福祉専攻科の介護実習について(その2)—実習指導の効果と課題—」瀬戸内短期大学紀要, 31, 33-39, 2000.
- 終崎京子・田中秀明・中野いずみ・ほか「介護実習における学生の不安(3)—介護実習不安尺度の因子構造と2年間の時系列変化—」共栄学園短期大学研究紀要, 19, 97-109, 2003.
- 横山さつき「介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究」中部学院大学・中部短期大学部

研究紀要第9号, 125-133, 2008.

是枝祥子『新・介護福祉士養成講座 第3版 介護の基本I』（第1章第1節）中央法規, 2016.

高橋ゆかり・本江麻美・古市清美・ほか「看護学生の特性と精神看護学実習におけるSense of Coherenceとの関連」日本看護学会論文集看護総合, 41, 295-298, 2011.

戸ヶ里泰典・山崎喜比古「ストレス対処能力SOCの社会階層間格差の検討—20歳～40歳の若年者を対象とした全国サンプル調査から」社会医学研究, 26(2), 2009.

高阪悠二・戸ヶ里泰典・山崎喜比古「中高年期におけるストレス対処能力(SOC)と健康関連習慣の関連」社会医学研究, 27(2), 2010.

蝦名玲子「首尾一貫感覚を高める要因」看護学雑誌, 67(9), 934-938, 2003.

江上千代美「看護学生の首尾一貫感覚と精神健康度との関係」心身健康科学, 4(2), 111-116, 2008.

中島朱美「医療・福祉従事者のストレス対処とSOC (Sense of Coherence) の関連」介護福祉学, 15(2), 172-181, 2008.

Antonovsky A.(1987)Unravelling the mystery of health;How people manage stress and stay well.Jossey-Bass Publishes,San Francisco.[山崎喜比古、吉井清子監訳(2001)健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム—有信堂光文社]

山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子『ストレス対処能力SOC』有信堂, 2008.

山崎喜比古「健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC」Quality Nursing, 5, 825-832, 1999.

齊藤和貴・岡安孝弘「最近のレジリエンス研究の動向と課題」明治大学心理学研究, 4, 2009.

米田龍大・児玉壮志・安藤陽子・ほか「首尾一貫感覚とレジリエンスの類似点と相違点に関する量的検討」北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 14(1), 59-64, 2018.

山中政子・平賀元美・中本明代・ほか「成人看護学実習における学生の首尾一貫感覚(SOC)に影響する要因」日本看護研究学会誌, 39(3), 203-203, 2016.

戸ヶ里泰典・山崎喜比古「13項目5件法版 Sense of Coherence Scaleの信頼性と因子的妥当性の検討」民族衛生, 71(4), 168-182, 2005.

縦野香苗・金子さゆり「基礎看護実習における看護学生のSOC変化とそれに影響するストレス要因」名古屋市立大学看護学部紀要, 15, 15-21, 2016.

遠藤慎太郎・満石寿・和秀俊・ほか「13項目7件法版 Sense of Coherence Scale (SOC-13) の信頼性と1因子モデルの妥当性について検討—大学生を対象としたデータから」立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 15, 25-38, 2013.

廣野正子「特別養護老人ホーム介護職員のストレスと仕事満足度—Sense of Coherenceの視点に注目した質的研究—」郡山女子大学紀要, 54, 223-238, 2018.

白井麻里子・金子さゆり・縦野香苗「看護学生のストレス対処能力と基礎看護学実習におけるストレス要因との関連」名古屋市立大学看護学部紀要, 15, 27-35, 2014.

高橋ゆかり・本江麻美・古市清美・ほか「看護学生の特性と精神看護学実習におけるSense of Coherenceとの関連」日本看護学会論文集看護総合, 41, 295-298, 2011.

伊藤裕子「介護福祉実習における実習指導者と養成校教員との連携のとらえ方—インタビューの語りから分析—」龍谷大学紀要, 32(1), 91-93, 2010.

澤田信子「介護実習教育は成長・自己実現を助ける“秘められた宝”」月刊福祉, 90-93, 2004.

『介護実習指導のためのガイドライン』公益社団法人日本介護福祉士会，2109.

『介護福祉士養成テキスト第2巻介護の基本／介護過程』日本介護福祉士養成施設協会，2014.